宗像

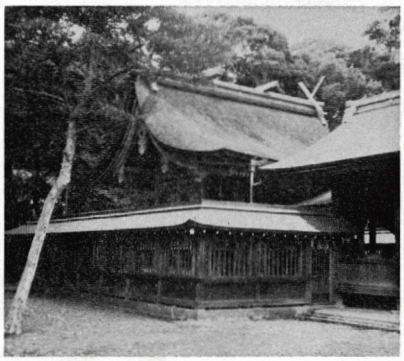
毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像社会
福岡県宗像郡玄海町
電話 09106 ③ 1311 代
定価 一年送料共 1,000円

神具、装束
結婚式場用品
九州店
本社
株式会社 井筒
福岡市博多区東公園二一三一（〒八一二）
電話福岡（九二）六五一―九四五六番
京都市下京区加小路八条北入（〒六〇〇）
電話京都（〇七五）三三四―三三四一（代）―三三四一番

遷宮祭
十周年記念大祭

辺津宮本殿

沖津宮本殿



中津宮本殿

十一月十二日、遷宮十周年記念大祭が盛大に斎行された。昭和八遷宮ともいうべき御本殿の大修復を中心とする辺津宮境域の復興整備を終え、畏くも勅使の御参向を仰ぎ昭和四十六年十一月十二日、遷宮大祭を斎行してから早や十年を経過したが、今年特に遷宮十周年記念大祭として思い出も新らたに斎行されたものである。

当大社の復興事業は遠く戦前に佐三会長の下に宗像大社復興期成会が結成され復興遷宮の第一歩がとなったが、これと併行して神社境域遷宮整備の機運が高まりつつあったが、時あたかも国の重要文化財である御本殿の修理保存事業が決定し、昭和四十四年から二ケ年の間に解体修理が行われることになり、これを契機として宿願の大遷宮を併せて推進達成することになった。先ず神社前面に十戸の民家を含む二千坪の用地を買収しここに祈願殿及び大駐車場を新設した。更に境内には勅使館、斎館、被斎、手水舎、守札授与所、参拝者休憩所、相撲場等を新築し、次いで二千棟余の末社、旧斎館、神饌所、清明殿の改修を行い、また忠霊祠の復元、境内各所の植栽造園、大鳥居、大灯籠の移殿等により整備を終え、ここに中世まで隆盛を極めた当大社の荘厳な神域の復興を見るに至った。総工費約十億円、しかも二ケ年という短期間に遂行された神社遷宮史上稀にみる偉業であったといってもも過言ではない。

昭和四十六年十一月十二日厳粛盛大に遷宮大祭が斎行され社史に特筆大書すべき感激の一日であった。その後三日間に亘り、神宮舞楽、人間国宝井上八千代師奉納舞、東霧島神社神楽、剣道、柔道、相撲、菊花展、花火大会等各種の神厳行事が繰り展げられ、宗像の森は神人和楽の喜びに沸き立った。

この十年前の感激も新らたに斎行された十周年記念大祭には復興期成会役員、氏子評議員、各地宗像会、官公庁役職者、用地提供者、用地委員、工事関係者、全国崇敬者等約四百人の方々が参列し、思い思いの感懐を胸に神前に敬虔な拍手を捧げた。祭典終了後幸津宮より謝辞が述べられ、次いで参列者一同を幾功成った儀式殿に奏内し殿内を披露した。この後、直会の祝宴が催されたが境内に馥郁と香る三千余鉢の菊花を愛でながら人々は歓談の一刻を過し秋の一日を楽しんだ。

このように遷宮祭より十年を経過したが、その後も今日まで引続き当大社の造営工事は間断なく行われ（概略は二面に紹介）、これにより沖津宮、中津宮、辺津宮三宮の復興整備はほぼ完了した。また菊花展、短歌、かるた、囲碁、将棋、柔道、剣道、長刀等の文化行事も定着し年々盛大に行われ、御神徳の霊威を仰いでいる。これも偏に崇敬者位の熱誠強なる赤誠の賜であり、その御協賛に対し厚く御礼を申上げる次第である。

論説　飲食求道
――おんじきぐどう――

禅門の用語を発音の通り仮名書きしたのが標題で、飲食求道はその原語、門外漢にはどのように書いてもなじめそうにはない。琉球では「滝落し」をたちつしと読むが、所変って品が変って通用の意味は同じと解かれている。

宗門の先達ら窮屈そうな解き方をするやに考える人もあるが知れぬが、いかなる場合も十分の自由が存在する。明治の新時代になって「板垣死すとも自由は死せず」と、自由主義を真向から振りかざした板垣退助だけが自由であったのでなく、極端から知れぬが鬼ケ島征伐に出軍の桃太郎の家来になった犬猿雉の動物にも自由はあった。鬼ケ島を強制されもせず、家来になるならぬも勝手で、自発的に吉備団子を食った彼等には自由があった。

飲食求道が自由解説のわき道とそれたが、先般のテレビ報道に、臨済宗本山の天龍寺派の修業道場に通常人の訪客があって、関管長（牧翁）七十八歳になっての自給自足論義に一寸触れておく。訪客の女性と食事を共にする。一汁一菜とよく言うが、客には五菜がつけられている。勿論、魚などは片鱗もつけてなく、煮だしにも用いない。三千年以上渋煙草を摂らないし、健康状態に何の異常も持たない生活が続く。自由で楽しいに違いない。

比叡山の護摩堂で、大護摩供、二千枚を焚く内海俊照師の話も出た。修業はどこも厳しく手加減はない。それでもびびと自由である。そして楽と見える。

何の修業であれ、京都にはそれ程名の通る場所は多い。禅道は無論、文学、芸術、料理、雅楽、武道など、京都はどれを執っても本山的地位は崩れない。牛若丸のように智兵が相手に欲しければ、五条大橋に起ってよいということになる。そこまで到達すれば落語と笑うからやめよう。

要するに一宿一飯程度の最も単純な生活の中にも、道を求める自由と楽しみはあるというのである。仏道に精進してやがて大智正にでもなってくれたらとの親の念願から、仏門に入れたところ、小僧の沙婆気は全く去らずラジオやテレビの歌舞に熱中する仕末に愛想をつかした住職が、支給した僧衣を取りあげて寺門追放に処置したら、喜んで芝居の門下生を志し遂に喜劇鳴らす小僧には楽しみも自由もなかったが、芝居小屋の奥では「くどう」の人生希望が成長したのである。

菊池寛といえば数十年前に誰知らぬ者もない有名な作家であるが、彼の書いた「恩寵の彼方へ」も一世を風靡するような傑作であった。耶馬渓を流れて中津に注ぐ山国川に取材した。青の洞門は今日遊覧の名所となっているが、禅海が峻しい難所を通行する人達に頻落の悲劇が絶えないところから、岩山を掘鑿して庶民の難儀を緩和したいと一念発起し、青の洞門は始まる。誰からも頼まれず、一文の収入にもならぬ岩壁への挑戦は、気狂い沙汰であった。

降っても照っても投れても、禅海の金槌は手を緩めなかった。湯茶も飲めざろう、世間なみの温い米飯は口にしなくても、労働が空腹を呼び何かの食べものを摂ったろう。それが「求道」（ぐどう）である。それに生命を預けていた。そこに希望と楽しみが生きていたに違いない。

総じて寺社で行う公式の仏事祭儀に、参拝者が異様に感ずるほどの意入りは宗教の本旨に適っている、信仰の真姿顕現と一概に言えない疑問を懐くこと少くない。参拝臨席の女性に、気楽に語る老智長七十八歳の肩に頼もしさがある。楽しさ親しさが籠る。

この辺でテレビが放送されだしたので、ペンを休めて画面を見る。内容は雄々国道の開通として北海道東部沿岸に峡岨な岩壁をくり抜いて完成の新国道、尤も距離や難所の程度は前述の禅海の青の洞門とは比較にならないが、機械力発達の産んだ雄冬国道が禅海上人の偉徳を讃えさせた機縁も面白い。敢えて上人を崇めたい。

西欧ならこんな場面に十字架が見られる。我が国なら観音像であろう。「おんじきぐどう」が序ながら十字架や観音像まで飛んだが、島原の乱以後キリシタンの迫害やかましくなり、捕えられた一部の隠れ切支丹は山陰の津和野に移されて、哀愁の結末となっている。その供養のためでなく津和野は遊覧客ばかり。

阿蒙少言

日常会話の難物は方言である。昨今は学園で出来るだけ難解の方言を避けた教科書が統一されてきたので、転校などによる不合理は一応解消されている。然し、教科書に載らない日常会話では、難解の方言が幅をきかし、不合理の解消は交句なしとは言えない。◉歌舞伎の舞台でのみ使われるもの、祭その他特別の地域行事にのみ顔を出すもの、それらは一般には通用せず理解されにくくとも、さしたる困難を引き起さないが、ここに笑えぬ難物を三等げてみよう。◉「ゲベス」と言えば大分県の国東半島だけで使われる祭事の方言だが、お隣の福岡県では解らない。ラジオやテレビ普及の今日でも、地方の特殊なもの殊に祭れなど顔を出す語彙は厄介である。「ゲベス」はその代表的な語彙かも知れない。国東半島の奇祭ゲベスは祭事浄めの所謂火の洗れということになる。◉ついでだから「ゲベス」に似た難物を少々引き出してみよう。歌舞伎の舞台で聞く「チャン」なども解りにくい語彙に違いないが、聞きなれた歌舞伎ファンにとっては問題ではあるまい。幼児の言葉チャンも武士階級ならば使わない。下層の職人家庭に限られていた。商人の家庭でも使わなかったようである。◉総じて農業と漁業を生活の要素として密接に結びついてきた我が国では、どこの特殊行事も農漁に基礎が置かれている。新年節、じょんから節、刈はら唄、しばき節など農耕につながる名称で、しばき節のしばくは麦藁をたたく意味で方言として現在生きている。いたづらをして兄貴にひどくしばかれたとか、久留米師団の新兵時代居眠りして古年兵にしばかれたとか言った記憶がある。◉節は少々違うが、長持唄、相馬盆唄、おてもやんなど地方の香りをなつかしませる。よさこいぶしは土佐の香りがある。集めると面白い。（白雲）

第三五回　宗像大社歌会詠草

毎月一日〆切　詠草到着順

八幡西　磯谷　緑雨
独り来て遊く秋惜しむ湯の宿の夜の更ちを遠つ瀬の音
津屋崎　内田　久美
音の出ぬテレビにむかって此の幾日音を創りて独りの春は
鐘崎　岩瀬　辰夫
一年間の努力見事に入賞す大社菊花展に友の花観る
宮田　片山　一
バイパスの堤防高く見る限り宵待草の花のさき浪
曲　天野トモエ
コスモスの後片付けをなし終りたのしみ眺む薩摩きの花を
吉留　高山　信子
いたわりの心しきりに湧きいづるけささかいし夫に対して
武丸　原田まつ代
朝明けの西空の月白々と庭の木槿をおぼろに照す
福間　広渡一寿軒
徳ゆるなき言の友は闇の世を信仰一途に八十路まで生く
福間　二宮　末子
佐渡ケ島行けぬ吾身を思やり友は語ろう旅の土産に
箱崎　吉村　三郎
薄い灯に人行く影の過ぎもけは夜氷雨の糸は窓を写せり
吉留　白木うめの
ためらはず空行鶴を拾ひゆく吾よりはなれ孫は歩り
原町　八波　五月
敲されている甘へて天の廻り行き届かざる意情を思ふ
須恵　早川　フサ
神さびし招魂の式は始まりぬ斉場の菊花しつもりて見ゆ
徳重　松石や寿子
目かげして町より帰る路のわき薄そばの花おちこちに咲く
田久　立花　勇雄
破れたる麦藁帽子を取り替えて今年も立てぬ古りし案山子を
戸畑　田中ハツセ
渓谷の洞の向うに陽のさして明るき世界展けゆくごとし
池田　永富　臻
神さびし招魂の式は始まりぬ斉場の菊花しつもりて見ゆ
徳重　松石や寿子
佐渡ケ島行けぬ吾身を思やり友は語ろう旅の土産に
箱崎　吉村　三郎
薄い灯に人行く影の過ぎもけは夜氷雨の糸は窓を写せり
吉留　白木うめの
ためらはず空行鶴を拾ひゆく吾よりはなれ孫は歩り
原町　八波　五月
敲されている甘へて天の廻り行き届かざる意情を思ふ
須恵　早川　フサ
徳ゆるなき言の友は闇の世を信仰一途に八十路まで生く
福間　二宮　末子
人通り絶えたる路に吾れてゆくしばし余光の紫薇つる
宮田　片山　朔子
手にもきて噛りてみたし旅の日のバスより見ゆる赤きりンゴよ
原町　中村　幸
枝に児が拘りつけたる風車夕方まけて音あり廻る
福間　山本　夏枝
菩提寺のお会式にまいる坂道樣の黄葉風にちりくる
東郷　田中　春子
ゆとりなく過ぎこし夏かも見上げたる山茶花は雪数多つけりを
日の里　清原　絹代
ベナン島の浜の並木は天に伸び夕焼の空宿より見ゆ
香椎　桜井　ツ子
芽の伸びて紅すれたるかなめも切り揃へをり爪立ちをして
田久　小方　実
黄砂荒（すさ）む枯野に出て帰らざる兵七人の跡追ひし事あり
田熊　鷲津かつ代
草もみじ明るく映えぬひとしきりしぐれ後を洗る鶏さしに
名古屋　野崎　傳三
雪打撃の塔の裏間に薬師寺の鳩ら並びて西陽に向かり
田熊　力丸　一郎
新築を急ぐ東鶴校の槌の音照る宵のしじまに響く
津丸　古賀　文月
求めたる柿を片手にこけ石をふみて登れる秋月城址
福間　中村　勇
剪定の吾の脚立を支へる妻の手かすかに震へてをりぬ
東郷　藤崎　辰子
人参を与へるわれを見るとなく馬の瞳の空に透める
深田　中野　節子
弱る小励ましながら春を我に枝豆と蚯蚓が持ち来ぬ
津丸　藤田　肇
アドバルーンポツカリ浮いて陽を浴びる日本の平和長く続けよ
武丸　原田　リノ
車よりわれに手を振り帰りゆく曾孫また来よ古りしわが家に
津屋崎　谷口　礼子
線香の綾の鼓のその人は源作と名のりし朝倉人
福間　山本　夏枝

遷宮祭から十年

＝歳月の流れの中に見る御神域の整備＝

昭和四十六年十二月十二日、宗像大社では、勅使の御参向をあおぎ、大社史上未曾有の大祭典「遷座の儀」、十二日「奉幣の儀」が斎行されてから、今年で満十年になる。「光陰矢の如し」月日の流れは早いものである。

この十年間に当大社の御神域も大きく変貌した。これら各種の造営工事をふり返って見た。

●神島沖ノ島に社務所新築●

昭和四十八年六月に沖ノ島沖津宮社務所が新築された。

これは、明治三十八年四月に同島に灯台が完成してから約七十年間、灯台と神社は密接な関係のなかに、沖ノ島の防人として生活して来た。ところが、海上保安部の集約管理化が進められ昭和四十八年度より灯台の無人化が通達されたのである。

これを機として新社務所の建設にふみきり、辺津宮と沖津宮と海上六十キロを結ぶ業務用無線電話が設置され、ここに神宮一人の防人生活が始まり現在に至っている。

●沖津宮遥拝所工事竣功●

昭和四十九年十月、大島村岩瀬に建立されている「沖津宮遥拝所」の屋根葺替工事が完成した。この遥拝所は、筑前続風土記によると、常時は沖津宮の祠官一ノ申斐河野氏が祭祀を行ったとある様に、元禄年間以前から既に建っていたと思われる由緒ある建物であるが、明治、大正と再三の修改築が行なわれた。さらに、

昭和八年に現在の遥拝所に改築されたものであるが、玄界灘の潮風をもろに受ける場所であるだけに風雨による損傷がひどい。この年の春三月、弘江組の施工により修復工事が行なわれ、九月半ば工事を完了した。

●第二宮・第三宮造営●

昭和五十年五月二十日、宗像大社第二宮（ていニ宮）第三宮の遷座祭、二十一日奉祝祭が斎されている。又、「この第二・三宮の御造営につきましては、伊勢の神宮から特別の御配慮を賜きまして、皇大神宮の別宮でございます伊佐奈岐宮、伊佐奈弥宮の二宮のご殿を賃戴致しまして再建いたしたのであります。この席をお借りまして神宮をはじめ関係の皆様方に厚く御礼を申し上げます。

この第二・三宮と申しますのは辺津宮を総社第一宮と申しあげ、沖津宮を第二宮、中津宮を第三宮と申し上げます。三社あった社が今から約四百年前、宗像氏の時代に社がなくなりましてから今日に及んだ次第です。

この三つのお社が完全に揃うまでは、宗像大社のご造営は終ったことにはなりません。長い年月をかけて、今日無事で出来上ったというわけでございます。」……と喜びをのべている。

●照海殿と中津宮職舎の完成●

昭和五十年八月二十三日、宗像大社中津宮「照海殿」竣功祭が、中津宮拝殿にて斎行された。

照海殿とは、元帥東郷平八郎の奉献になる「神光照海」の扁額から、久保名誉宮司が命名された参集殿である。この土地は大島港を一望できる中津宮参道下の二〇〇坪の海面を埋立、造成を行った。これに約六〇坪の参集殿が建設され、この建物を「照海殿」と云う。現在まで結婚式披露宴を始め各団体参拝者休憩所等広く活用されている。

又、同敷地内に立派な職舎も新築された。

●中津宮末社松尾神社遷営●

昭和五十三年三月四日、宗像大社中津宮境内末社、松尾神社の遷座祭が斎行された。

この松尾神社の経緯を尋ねて見ると、大正末期までは同社の岡境神社と称されていたが、昭和の頃より、京都嵐山の松尾大社の主祭神市杵姫命は、宗像大社の祭神である事が世に喧伝され、全国酒造家の崇敬を受ける事となり、芳醸講が結成される迄になった。

昭和初期岡境神社に松尾大社の神霊を合祀し社名を松尾神社と変更したと伝えている。

●中津宮社務所大改修工事●

昭和五十三年四月、中津宮社務所の大改修工事が完了した。

中津宮社務所は建坪約四十坪、銅板葺平家建の本造家屋で、昭和十一年に改築が行われて今日に至っているが、四十数年を経て最近は一部雨漏がみられる様になり、昨秋より改修工事がなされて来た。今回の工事により屋根工事から土壁工事、建具から畳・照明器具類ますべて新調された。

●宗像大神宝館完成●

昭和五十五年十一月八日、宗像大社神宝館が竣功落成した。

"沖ノ島森しげみの岩かげに千歳ぶりにし神祭りのあと"

昭和五十年新年歌会始めに、三笠宮殿下が神島沖ノ島での学術調査をしのばれてお詠みになった詠進歌である。当社の神宝類は沖ノ島祭祀遺跡を始めとする、大長、高宮祭場より発掘された国宝、重要文化財類数十万点がある。これらの神宝類管理に、昭和三十九年宝物館が建設された。しかしながらその後の文化財の飛躍的増大にともない一堂にこれらの神宝を展示管理するのがむずかしくなった。

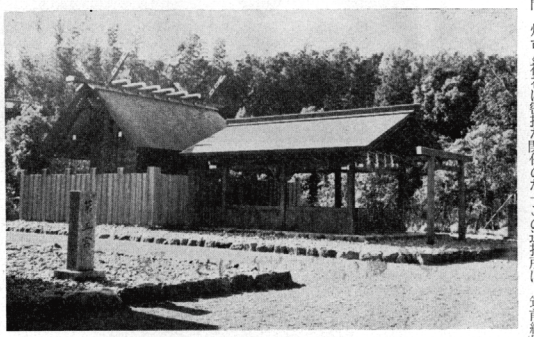
昭和五十三年十月、ここに昭和の大造営工事の最後を飾る大工事として神宝館建設の計画が進められたのである。総事業費七億円という大工事となった。

ここに満二年の歳月をかけて、鉄筋コンクリート三階建高床式延面積約三千平方メートル（約六百坪）の立派な建築物が完成した。設計にあたっては特に文化財の保護保存に重点がおかれ、直射日光や湿気などの外気の影響を防ぐため窓は一切設けず、壁は二重構により太陽熱を遮断するという特別設計がほどこされた、茲に全国に誇りうる神宝館が完成したのである。

●儀式殿竣功●

昭和五十六年十月六日、儀式殿竣功落成の式典が執り行われた。この儀式殿は、東京九段の靖国神社斎館を移築復元したものである。この斎館は昭和九年、陸軍省の設計により、社寺工務所が建設した総合檜造り銅板葺平家建八二五平方米の建物で、その中には両陛下の三十数回に及ぶ行幸啓を仰いだ便殿（御休憩所）の一室が含まれ他に類を見ない由緒をもつ建物である。

以上当大社の造営工事を中心に振り返ってみたが、この十年間の整備充実には著しいものがある。しかしながら宗像大社の復興を軍生の宿願として全力を傾倒された復興期成会長出光佐三翁が、今春九十七才の生涯を終えられたことは痛恨の極みであり哀惜の念にたえない。ここに生前の御業績に対し深く感謝すると共に謹んで哀悼を表する次第である。

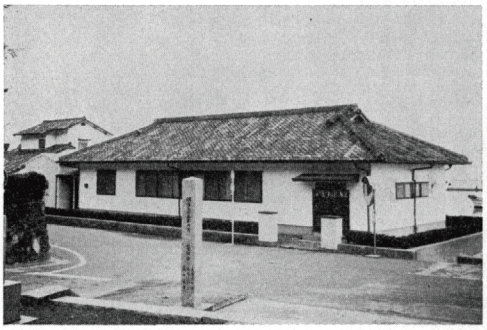


遷座された第二・第三宮

沖津宮遥拝所

沖津宮社務所

中津宮社務所



中津宮照海殿と職員社宅

竣功なった儀式殿

"青竹の箸"

―日本人の傑作品―

わが国で日常通用する箸は、大体二本の直線である。フォークやナイフで食べる西洋料理と違い、日本料理は二本の直線ではさんで食べるものが多い。青竹にしろ柳箸にしろ、はさんで食べる器用さには、欧米は勿論世界中のどの民族もかなうまい。

フォークやナイフと柳箸を比較して自慢するほどのこともないが、親和の食卓に兵器や平和の象徴がそれぞれ代表的に登場している感もある。

釈迦はとも角、基督は動物の肉を食ったに違いない。愛を説き平和を高唱しても、殺傷は認是したのである。後世の神道精進の高僧の如き無殺傷の生活を貫いたとは思えない。特にあまり魚類を摂らぬ欧米民族は、牛馬羊豚を食べる習慣は自然である。基督が鯛のさしみに舌鼓をうったと言えば笑話である。

元来、欧米人に限らず仏道人にも限らず、動物質の食物を摂らなくても生きられ、しかも長命をも持たれる。数年前亡くなった妙心寺の古川大航師は、その二十才の時死去された母常が、遺言同様に訓えられた言葉を生涯実行されたと聞く。動物の肉はどんな小さいかけらも食べるなとの訓えで、言葉は簡単でも長い人生これを実行することは容易でない。大航師は母堂に誓った通りに、生涯これを守り抜かれた。

何事も言うは易いが五十年以上も実行して誤りなきは、至難のことである。殊に宗教的戒律を通して天地に仏弟子ここに在りの実証を顕示するは、至難なこの言葉の芸ではない。

大航師参拝の一服時に、随行した七十余才の二人の老師に昼食の用意を語り、神湊まで行けば十分に食事摂れるがと誘ったところ、われは何でも頂くが、老師の食事は玄留米で準備することになっている、梅林寺に連絡がしてあるとか。

そこまでは、まだかなりの時間がかかると思ったが、まさかひそかに神湊の旅館でゆで鮸咬むわけに通である。杉で出来ているのが通常だが、青竹の二本棒が時折見かけられる。青竹の直線箸といっても、使用する時に割るのは杉箸と同様である。

青竹の直線箸、清潔感があり丈夫でもある。とても食事中折れるなどの危惧はない。安心してどんな重味の食糧でも挟めるので、この箸に出会うと嬉しい。

もっと理窟を言うなら箸という字が竹冠であって、箸は竹に始まる。ナイフ・フォークなどを操って動物の肉塊を骨から分離して直に口辺に運ぶなど、野蛮人の食生活で、日本の竹箸の前には頭があがらぬと思うも日本流か。

沿岸の魚族を大量に食うイルカ群を、日本人漁師は殺したくないが、漁獲収入・生活目衛の立場から殺傷する場合がある。この報道に一部の外国人は悪魔のように罵る。中には遠方から来日してイルカ隔離の施設を破壊した行動する。その当人が牛豚を平気で食って、イルカ助命だけで動物愛護の大精神を実行したつもりである。

牛豚イルカに訊かねばわからないが、まさにナンセンスである。

ナイフ・フォークは笑っている。洋風食事道具は愛の教祖基督が発明したわけでもあるまいが、二本の日本流竹箸子から見ると、動物殺傷の兵器の性格がある。若し、基督が日本流竹箸子を、主張していたら十字架にかけられなくて平和な愛の生活を楽しむことができたかも知れない。

博愛も平和も言うは易く行うは難い。現代の欧米の各階層に、智者も多く秀れた宗教指導者も少くないが、核問題のからむ政治情勢は遠かでなく、関係政治家の平和論が全世界の人心を安心させるなど夢である。

日本人の傑作品として二本の青竹の箸を誇りに思っている。昨今発表されたAP通信の最新世論調査によると、今問題の中性子爆弾の生産、貯蔵に関する米国民の賛否は大きく割れており、また過半数が今後数年間は戦争に巻き込まれないとみる。二本の青竹の箸がよい。

× ×

残筆しがらみ草紙 (57)

玄陽隠士

遷宮記念大祭

各種神賑行事盛大に行なわる

―錦秋の一日くっろぐ参拝者―

昭和四十六年の荘厳な神苑を再現した御遷宮より早くも十年、今年はこれを記念して十一月十二日遷宮記念大祭が斎行された。

これにともない種々の神賑行事が例年にも増して盛大に錦秋の神苑で行なわれた。

まず十月三十一日より西日本菊花大会が開かれた。

神門前境内は、大輪、懸崖などの菊花が咲き競い、菊の花で埋まり、菊花の香りがただよった。おりしも七五三祭と重なり、親に手をひかれた幼子達の着飾った姿が目立った。またあちこちで写真を撮る風景が目立ち、のどかな風景であった。西日本一と称される菊花展は、十一月二十一日まで続けられた。

一日はまた二回目を迎えた"なぎなた大会"が本殿横の境内で開かれ、小中学生の少女が日頃の腕を披露したが、尚武の地"宗像"の真髄を感じさせるものがあった。

三日は、剣道大会が開かれ、宗像地区を中心に七百名をこえる小中学生を主とした男女剣士が集合し、熱戦をくりひろげた。天候の都合により玄海海洋センターで開かれたが、会場には、気合のはいったかけ声が、午後四時すぎまでつづいた。

また この日、今回より吟剣詩舞大会と名づけられ、清香吟社（本部熊本市）の一五〇名が集まって開かれた。美声に剣舞に会場の清明殿は、感嘆の声がもれ、またさかんな拍手がつづいた。

つづいて七日は、宗像地区の柔道の八中学校新人戦が玄海中学で開かれたが、各選手とも動きが軽快で、気迫にあふれていた。

八日は、道を求める神「宗像大社」の神域に、西日本地区の「かるた道」愛好の人々二〇〇名を集めて、第五回かるた大会が開かれた。個人戦で五階級に分れて、小学生よりおとしよりまでが熱戦を展開した。さすがに手つきが速く、目を見張るものがあった。

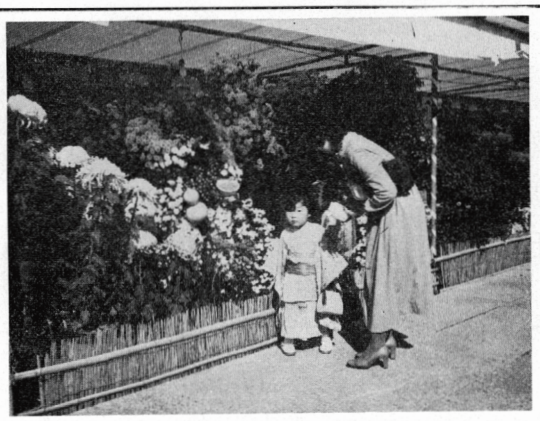
八日より十二日までは、第三回奉納盆栽展が開かれ、宗像地区の愛好の方々が、秘蔵の一五〇鉢を展示した。会場の祈願殿ロビーは、盆栽を鑑賞する人々でいっぱいになった。

つづいて十五日は、第十回獄詠短歌大会が開かれた。県内外より二〇〇余名が参加し、福岡教育大学の山田輝彦先生による「短歌の心」について講演があり、一同深い感銘を受けた。

またこの日は、宗像地区囲碁界の最高位を決める宗像大社本因坊戦、また境内では、日本少林寺拳法連盟宗像支部（代表、吉田正雄氏）の会員による模範技の奉納が行なわれた。

天候にもおおむね恵まれ、多くの参拝者も賑わった遷宮記念の神賑行事も二十一日の菊花大会の閉会をもってすべて終了した。

なお七五三詣を記念した「七五三写真コンテスト」の入賞作品は祈願殿二階に展示してあります。



（なぎなた大会）

（吟剣詩舞大会）

（かるた大会）

第十一回西日本菊花大会

県花市場協議会賞＝福岡市・吉留英夫（懸崖）
〃　福岡市・大塚秀雄（盆栽）
粕屋郡町村長会賞＝佐保市・溝口男三（大輪）
〃　飯塚市・安永秀喜（懸崖）
遠賀郡町長会賞＝北九州市・桑原忠雄（大輪）
〃　佐世保市・橋本義弘（盆栽）
宗像郡町村長会賞＝北九州市・阿部武男（大輪）
〃　飯塚市・川崎正木（大輪）
〃　門司区・駒山貫次（大輪）
〃　北九州市・羽地好子（盆栽）
〃　北九州市・内田テル子（盆栽）
〃　佐保市・熟行一男（懸崖）
〃　宗像郡・内藤熊雄（特別作品）
〃　北九州市・塩川辰雄（特別作品）
遠賀町長賞＝北九州市・波多野松雄（大輪）
〃　北九州市・森川源三郎（大輪）
古賀町長賞＝粕屋郡・矢野　定（大輪）
〃　北九州市・加藤忠雄（大輪）
宗像市長賞＝北九州市・阿久根力（大輪）
〃　福岡市・箱島春男（盆栽）
〃　津屋崎町長賞＝北九州市・木村平八郎（盆栽）
〃　宗像郡・岩井光利（大輪）
福間町長賞＝佐保市・小久保茂（大輪）
〃　飯塚市・富本義満（盆栽）
玄海町長賞＝佐保市・岡本興之（大輪）
〃　北九州市・高田太助（大輪）
〃　北九州市・斉藤辰次（大輪）
〃　佐世保市・横山持丸（盆栽）
〃　宗像郡・高橋民夫（盆栽）
〃　北九州市・池上福元（大輪）
〃　宗像郡・吉崎三吉（大輪）
〃　北九州市・前野ますえ（特別作品）
〃　鳥栖市・時田義光（特別作品）
大島村長賞＝宗像郡・寺島トミエ（大輪）
〃　北九州市・杉下松雄（盆栽）
宗像大菊花会賞＝宗像市・古川明（大輪）
〃　武雄市・松尾為夫（大輪）
〃　佐世保市・石橋正利（盆栽）
〃　宗像郡・井上喜三（懸崖）
〃　武雄市・松永宏栄（特別作品）
〃　北九州市・片桐ツル子（特別作品）
遠賀郡農協賞＝北九州市・田中弘（大輪）
〃　北九州市・竹内　豊（盆栽）
宗像農協賞＝北九州市・佐野　功（大輪）
〃　宗像郡・寺島大太郎（大輪）
〃　宗像郡・吉田重三郎（盆栽）
〃　佐世保市・北川俊八（盆栽）
津屋崎町商工会賞＝北九州市・清家仙三（大輪）
宗像市商工会賞＝宗像市・湯浅ユキエ（大輪）
福間町商工会賞＝佐市保・坂本藤夫（盆栽）
玄海町商工会賞＝宗像郡・寺島ユキ子（大輪）
大島村商工会賞＝北九州市・早野辰雄（大輪）
宗像大社氏子会賞＝粕屋郡・貴谷直五郎（大輪）
〃　宗像郡・中村　正（盆栽）
〃　宗像郡・篠原久雄（盆栽）
宗像市長賞＝宗像郡・篠原久雄（大輪）
〃　宗像郡・篠原久雄（盆栽）
〃　北九州市・加藤忠雄（特別作品）
神湊旅館組合賞＝北九州市・松岡勝美（大輪）
〃　宗像郡・吉武華月（大輪）
〃　宗像郡・桑野　勇（大輪）
〃　直方市・森田長命（特別作品）
宗像青年会議所賞＝飯塚市・安永秀喜（大輪）
〃　粕屋郡・長崎弥太郎（大輪）
〃　宗像郡・辻　五男（盆栽）
〃　北九州市・杉下松雄（特別作品）
ライオンズ賞＝福岡市・箱島春男（大輪）
〃　宗像郡・田中和代（特別作品）

まつり暦と一刀彫（戊）

来年のえと（イヌ）の一刀彫が元日より当大社で授与されます。

このお守りは、無病息災、延命長寿を祈念したお守りとして、多くの参拝者から注文が寄せられ、またたく間になくなります。

この一刀彫は、伊勢産の銘木である桐木を、伊勢在住の名工が精魂をこめ、一本のノミで仕上げた素朴な中にも気品のあるお守です。

初穂料　一体　二〇〇〇円

―◇―◇―

また当大社の年中祭典行事を主体とした「宗像大社まつり暦」の昭和五十七年度カレンダーが出来上り、社頭において頒布されており、特に年末始の祈願者には無料で授与されます。

この「まつり暦」には、各祭典行事が美しいカラー写真入で紹介されており、また祭典の月日が織り込まれているため、当大社の年中行事が一目でわかります。

なおまつり暦は、発行部数一万部、縦四十三糎、横十六糎で、十二枚綴り。

初穂料　一部　三〇〇円

神こうのみなと湊（107）

楠早鳥作
福田長庵画

巨星（その一）

医師の邸まで役人につき添われて来ると、屋外の気配を察したのか小者がでてきた。来意を告げると医師が現れた。予想したより老人であるのに明継は驚いた。その明継の顔を凝視した医師は、静かに大陸の言葉でくお出でをしよう〉と云い小者に薬籠を持ってくるように命じた。医師の目に光るものを見て役人は怪訝な顔をして〈お知り合いか〉と明継に問うた。咄嗟の機転で〈これは不思議なことで身よりの者〉と応えた小者を邸にとどめて老医師は黙々と明継一行と共に母着場に歩を進めた。碧眼の女人の濃い化粧の匂いが役人の心を浮かれさせているためか、饒舌に国内の様を語って聞かせた。幕府は大内攻めを明日にでもやりたいが何分にも村上の去就が判然とせぬため困っている。

昨夜は幕府から派遣された使者が村の有力者を集めて因島の情報を尋ねたと云う。戦さはそこまで来ている、いま義弘が死ぬようなことがあれば無益な血が流れる。そう思うと義弘の姿が大きく網膜にひろがった。

舟着場で過分な礼金を役人に渡し船に乗り移った。沖の大船に向う途中〈私のことを御存知でしたか〉と医師に問うと〈張士誠様の遺児にこんなに早く会えようとは思わなかった〉と返事がかえった。それに続く医師の話を聞くと、大陸では明朝の圧政により世情が不穏となった。江南の地では張士誠を慕う声が高く、それを承けてひそかに日本に逃れたと噂のある遺児を迎えに渡海してきたとのことである。医師の話は大船に乗ってからも続いた。明朝では張士誠ゆかりの人物が日本に存在するのを知悉している。そのため幕府は逮捕を要求する使者が送られたことまでを探ったので、近ごろ往来の繁しい草戸に居を古め情報を集めていたと云う。

帰国の話は後日のことにして義弘の病状を語り判断をくだった。患者を診たうえでないと正確には判らぬが と前置きして、医師は腕の矢立をとり懐紙に人体の図を描き頭の上に百会と書き心臓にいたる線を書いた。顔をあげて明継を見つめて〈多分この経路が切れるか傷害をおこしているに相違ありません。大酒を飲み赫顔の人に起る病気で〉と病状を説明した。如何なる手だてをすれば治るかと眉をひそめて問う明継に、〈若し万一この時刻まで命がながらえていれば経路が切れたとは思えぬのでここは気永に針灸をほどこせば、旧の身体に復せぬまでも寿命は保たれるに相違ありません〉と云って首のつけ根の個所に黒点を印した。

もっと効果のある方法はないのか、せき込むように問いつめる明継に〈今の医術ではこれが限度で外創なら方法もありましょうが体内のことは、恐らくこれ以上の方法はありません。若しそれができれば貴方の父上もあのお齢で亡くなることはなかったでしょう〉と諭すように語った。その言葉を聞いて明継の脳裡には大陸流浪の日々が走馬灯のように駆けめぐった。この老人が父の最期を看とった呂文河か、流浪の間に噂は聞いたことがある。稀代の名医であったが張士誠を徳とし、明朝となじまず、明継の逃亡資金も彼のもとからでているということであった。貴方が呂文河殿でしたか〉思わず明継にしがみついた。それを見て老人は〈病人のことは私に委せて、一先ず宗像とやらの地に帰られてはいかがな、その上で将来のことを充分にお考え頂きたいが、ただ二つ大陸では貴方の帰国を待ち望んでいる多くの人々が居ることをお忘れなく〉と云った。

上げ潮にのったのか船に一段と速力が加わったのを感じて明継は立ち上った。

×　×

大陸を出てからの環境をあまさず語った。水道にさしかかったのであろうか船が大きく揺れた。碧眼の女人が思わず明継にしがみついた。それを見て老人は〈病人のことは私に委せて、一先ず宗像とやらの地に帰られてはいかがな、その上で将来のことを充分にお考えいただきたいが、ただ二つ大陸では貴方の帰国を待ち望んでいる多くの人々が居ることをお忘れなく〉と云った。

上げ潮にのったのか船に一段と速力が加わったのを感じて明継は立ち上った。

×　×

宗像大社歌会 俳句作品集（三月）

八幡西　磯谷　緑雨

菊一輪卓に影濃き夜寒かな　津屋崎　井浦　良介

星きらめき窓越しに聴くワルツの曲　鐘崎　岩瀬　辰夫

庭隅の柿の実ちぎる日和かな　福間　廣渡　一寿軒

新米の栗敲ささぐ御霊前　久留米　入江　柳江

立冬やびかびかみがく窓硝子　名古屋　野崎　傳三

枯菊の鉢並べあり車庫の裏　田熊　安部　ゆき

運枯れて寺の静寂夕西　田熊　力丸　一郎

散紅葉飛騨路を染めて飛騨を去る　藤沢　玄洋子

丹頂の一声鳴きて山静か　飯塚　花田　耕月

是やこの銀杏の黄葉を敷きつめて

第二四五回 宗像大社 歌会詠草

宗像　吉田　和子

豊前路に臨む青春の三つ岳雲遊ばせて稜線澄める　武丸　立石ろせ乃

血圧の下ることなく老いゆきて肥大せる心臓の歩る日は何時　大島　中村　五月

大理石を刳り貫く道路続きをりタロコ峡谷の山は鎖ゆる　大島　屋形とみえ

亡き夫の位牌を背に登り来し篠栗札所の落葉は温し　大島　板矢あきえ

痛む足びきずりつつも来し駅に発車のベルの今鳴り終へつ

鐘崎民俗誌 その三十八

楠本　記

海女（あま）の婚姻（その2）

婚礼は幾つかの構成部分から成りたっているが普通つぎのように分けられる。（民俗学辞典）

婚約儀礼
婚姻成立儀礼
嫁引移り儀礼
披露

鐘崎では大正年間までは村内婚が通常であったので婚姻成立祝の前に、すでに二人の間に婚姻が開始せられていたことが多いようである。したがって婚約についての儀礼も仲人が嫁方と酒を酌みかわすだけで終っていたような例もしばしばあったが一応典型的な婚姻型式を述べることとする。

婚約儀礼としては世話人が婿方の意をうけて嫁方に縁談をもっていく。両者の意思が合致したところでスミザケをいれる。これは酒一升と鯛二尾で一升一鯛である。おそらく一生一代の慶事であるという縁起をかついだものであろう。スミザケは縁談が型式的な場合は最初から準備をしているが、難航した縁談が急纏まった際は、その日のうちに先方の気が変らぬうちに大急ぎで入れることがあるこのち媒酌人をたてるか否かが世話人を間にして両家で話しあわれるが世話人がそのまま媒酌人に移行することが多い。他の地方ではこのの婚姻成立儀礼の結納となるのであるが、鐘崎ではこの間においてテウチザケをおこなっている。媒酌人が婿方より嫁方に酒を一升持参し祝宴の準備は嫁方で全でおこなわれる。媒酌人のお披露目といった意味あいが強い。

これが終り吉日を選び結納を嫁方にいれることとなる。古くは酒一升と鯛二尾のみであったが、近年はこのほか専門店で結納の諸道具を購入しそれを媒酌人が嫁方に持参をしている。これは遠方婚の風習が普洲化をしたためであろう。次に嫁引移り儀礼であるが、まず媒酌人が嫁方に迎えに行き、出立ちの儀礼として、嫁が戸外に出ると門口で茶碗を割り、座敷を箒で掃きだす、これは葬儀における風習と同様である。前者は嫁が不縁になり再び実家に帰らぬようにといい、後者は死霊が生家に戻らぬようにといわれている。

こののち媒酌人につき添われ親類の人たちが彼らに従って行列を組み、実家をヒマワリ（左廻り）で一巡し婚家に赴く、途中で世話人の家か、親類の家でナカヤド（中宿）をとっていた。化粧なおしのためといわれているが、実用的な意味よりもっと他に重要なことがあったのではなかろうかと思われる。行列が婚家に着くと裏から入る。その際にムコサンマギラカシ・ヨメサンマギラカシがおこなわれる。ほぼ同年くらいの親類者が一緒に座敷にあがり込む。「どれが嫁さんじゃったか、わからんじゃったばい」と鐘崎の老人たちが笑うのをみると、大正時代頃までは文金高島田の花嫁の形はとられなく、晴れ着ていどの場合もあったように考えられる。

一同が座敷に入ると新郎・新婦が正面にすわり、嫁取り婚の場合は嫁方が上座、婿方が下座につき婿取り婚の時はその逆となっている。一同が席につくと三、三、九度の盃をとり交わし、このの披露となる。宴も果て新郎・新婦の床入りとなると嫁方の親類は帰途につくが、必らず来た時とちがう道をとるのを慣しとしている。戻る、帰る、ということを忌む習慣からそのようにしているのであろう。

婚礼が終って主婦となった印しとして眉剃り、入墨をする地方があるが鐘崎ではカネツケをしていた。お歯黒で歯を染める風習であるが大正の初ごろまでおこなっていたとのことである。

普通、婚礼が終る夫婦は親と同居をしていたが、なかには子供が産れる迄は嫁は実家に帰っていたようなこともあるという。労働力が減り家計に影響を及ぼすのを防ぐためにとられた形態である。

また若衆へは酒を贈り婚姻のお披露目としていた。里あるきは婚礼が終って七日くらいしてするのが通例であった。

以上、婚姻儀礼の大略を記したが「最近は出会いの祝儀になったので、こんなことも無くなった」と云う。遠方婚の風習が通常化をしたためであろう。

大島村に短歌会が誕生

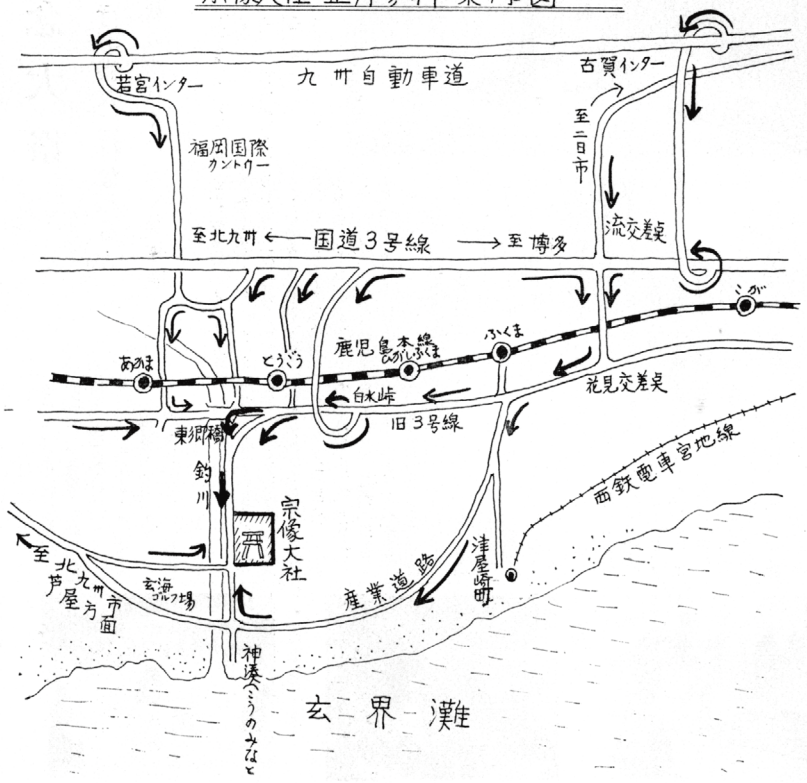
とかく文化活動がおくれがちな離島の大島村に、大島短歌会が十一月に誕生しました。代表者は目原節子さんで、今のところ会員は十一名です。

これまで、個人的には短歌の愛好者がいたのですが、仲間が一緒に集って研究する機会がありませんでした。そこで、同村の出身で歩道短歌会の同人、安川浄生氏を毎月招いて例会を開くことになり、去る十二月六日、第二回の例会が開かれました。

始めに基本的な短歌研究、あとで互選と互評会の形式ですすめられています。

安川氏は、宗像大社の御神幸をテーマに、昭和三十六年の毎日歌壇賞を受賞され、現在北九州市史編さん室長です。

宗像大社 正月参拝案内図



宗像大社境内図

正月祭初詣で参拝の道案内を上図並に左図の通りお知らせ致します。